

#### ④研究集会・講座等に関する事業一覧

プロジェクト名	担当部門	頁
第33回文化財の保存及び修復に関する国際研究集会（修07）	保存修復科学センター	69
平成21年度 公開学術講座（調査・研究成果の公開）（美05）	企画情報部	70
伝統的修復材料及び合成樹脂に関する研究会（*修03）	保存修復科学センター	71
近代の文化遺産の保存修復に関する研究会（*修06）	保存修復科学センター	71
国際文化財保存修復研究会（*セ01）	文化遺産国際協力センター	72
総合研究会（情）	企画情報部	73
企画情報部研究会（情）	企画情報部	73
保存修復科学センター研究会（保）	保存修復科学センター	74

- \*注
- ・ 伝統的修復材料及び合成樹脂に関する研究会は、伝統的修復材料及び合成樹脂に関する調査研究（①修03）の一環として実施した。
  - ・ 近代の文化遺産の保存修復に関する研究会は、近代の文化遺産の保存修復に関する研究（①修06）の一環として実施した。
  - ・ 国際文化財保存修復研究会は、文化財保存施策の国際的研究（②セ01）の一環として実施した。



## 第33回文化財の保存及び修復に関する国際研究集会 「日本絵画の修復 ―先端と伝統―」(④修07-09-1/1)

平成21年度は、「日本絵画の修復 ―伝統と先端―」をテーマとし、保存修復科学センターが担当して、文化財の保存及び修復に関する国際研究集会を開催した。世界各国における日本絵画修復の現状の状況を確認し、日本の伝統的な絵画修復技術の材料、工程などを科学的側面から分析し、また現在における新たな試みを検討した。これらの知識の共有を促すことを目的として開催した。

日 時：2009（平成21）年11月12日（木）～14日（土）

会 場：東京国立博物館平成館大講堂

参加者数：356名（3日間延べ人数：821名）

### 1 日本絵画修復の現状

#### 1-1 日本

鬼原俊枝（文化庁・日本）「日本における絵画修理の理念」

川野邊渉（東京文化財研究所・日本）「日本絵画修復における自然科学の役割」

#### 1-2 欧米

杉山恵助、ジョアンナ・M・コセック（大英博物館・英国）「大英博物館における日本絵画の保存修復」

ジェニファー・ベリー（クリーブランド美術館・米国）「クリーブランド美術館における東洋絵画修復」

中山俊介（東京文化財研究所・日本）

「東京文化財研究所事業『在外日本古美術品の修復協力プロジェクト』における海外工房での修復」

### 2 修復技術と材料

大川昭典（和紙技術研究者・日本）「材料からみた和紙の歴史的変化」

稲葉政満（東京芸術大学・日本）「和紙の保存性」

加藤雅人（東京文化財研究所・日本）「補紙・補絹の動向」

早川典子（東京文化財研究所・日本）「絵画修復に使われる糊と布海苔」

森田恒之（愛知県立芸術大学客員教授、国立民族学博物館名誉教授、総合研究大学院大学名誉教授・日本）

「日本の膠」

田畔徳一（国宝修理装演師連盟・日本）、川野邊渉、加藤雅人（東京文化財研究所・日本）

「修復における新たな試み」

山本記子（国宝修理装演師連盟・日本）、早川典子（東京文化財研究所・日本）

「新しい材料と新しい技術―科学の裏づけと技術者の選択―」

### 3 修復と自然科学

ブライス・マッカーシー（フリーア美術館とアーサー M. サックラー ギャラリー・米国）

「フリーア美術館における科学的研究と絵画の保存修復」

ジャッキー・エルガー（ボストン美術館・米国）

「ボストン美術館における日本絵画コレクションの保存修復と科学分析」

本田光子、藤田励夫、志賀智史（九州国立博物館・日本）

「伝統を継承する先端施設の取り組み―九州国立博物館の場合―」

### 4 総括

総合討論会

## 平成21年度 公開学術講座（調査・研究成果の公開）（④美05-09-4/5）

### 第43回オープンレクチャー「人とモノの力学」

企画情報部では、研究成果を広く公表するために公開学術講座を毎年秋に開催しており、本年で43回目を迎えた。昨年度同様、今年度も金曜日と土曜日の午後、2日間連続で開講し、聴講者の便宜を図るように努めた。今回も昨年度に引き続き「人とモノの力学」をテーマに掲げた。個々の講演内容は以下の通りである。なお、この講座は、上野の山文化ゾーン連絡協議会が主催して毎年秋に開く「上野の山文化ゾーンフェスティバル」の講演会シリーズのプログラムとしても企画されている。

今回は2日間でのべ258人の参加があり、参加者にアンケートを実施したところ、221人から回答を得た（回収率：85.7%）。結果は、「たいへん満足した」102人、「おおむね満足した」90人、「普通だった」13人、「不満が残った」2人、回答者の87%が満足感を得たことがわかった。

第1日：2009（平成21年）年10月2日（金）午後1：30～4：30、東京文化財研究所セミナー室

・土屋貴裕（東京文化財研究所）「『異国』をこしらえる―『玄奘三蔵絵』をめぐる―」

求法のため印度へとおもむいた玄奘三蔵の物語は、東アジアの仏教文化圏において様々なイメージを生み出してきた。日本においては、鎌倉時代後期、南都興福寺の周辺において「玄奘三蔵絵」という絵巻が制作されている。見たこともない中国・西域・印度という「異国」の地を、鎌倉時代の絵巻がいかに描いたのかを、「玄奘三蔵絵」、並びに同時代の関連作品から読み解いた。

・塚本麿充（大和文華館）「宋朝からみた日本僧―仏法・国土と文物交流の世界―」

日本は中国から多くの文物を受け入れてきた。では、中国はなぜ与え、また何を与えなかったのだろうか。今回は、仏教が重要な力をもった宋時代、それに引き寄せられるように入宋した人々を、中国社会がいかに受け入れたかを考えた。我々は見知らぬ相手もモノによって知ろうとする。当時の文物交流の世界から、中国にとって日本とは、そしてそれが東アジアの文化をいかに形成していくのかを考察した。

第2日：2009（平成21）年10月3日（土）午後1：30～4：30、東京文化財研究所セミナー室

・中野照男（東京文化財研究所）「大谷探検隊収集西域壁画の光学的調査」

東京国立博物館と韓国国立中央博物館が所蔵する大谷探検隊収集西域壁画は、ミーラン遺蹟、キジル石窟、クムトラ石窟、ベゼクリク石窟、アスターナ古墳などからもたらされた。それらの顔料や彩色技法を、光学的な手法や蛍光X線分析を用いて調査した結果、地域、時代、形状等による差がはっきりと見えてきた。炭素14による年代測定が導入されるなど、西域絵画の年代観の見直しが進む現段階において、大谷探検隊収集西域壁画の美術史的な位置付けを問い直した。

・白須浄眞（広島大学）「チベット宗教世界と大谷探検隊」

チベット宗教世界と大谷探検隊の密接な関係は、1908年の清国・五台山におけるダライラマ13世と大谷光瑞の弟・尊由との会談に始まる。英国のラサ侵攻によって蒙塵の身となっていた13世との接触は、チベットを焦点化する当時の国際政治社会に対するアクションと見なされ、以後、大谷隊は国際政治社会のなかに注視されていくこととなる。従来未承知のこの様相を、新たに見出した日英の外交記録によって解き明かした。

## 伝統的修復材料及び合成樹脂に関する研究会（①修03-09-4/5の一部として実施）

平成21年度は、各種漆文化財のなかでも建築文化財における漆塗装の調査と修理に関する現状と課題を主なテーマとして取り上げて研究会を開催した。日本では、漆を建築文化財の造営や修理の塗装材料として多用してきた歴史がある。漆は塗り肌の美しさや化学的な強さを持つ優れた塗装材料であり接着材料であるが、紫外線に弱いという弱点をあわせ持つ。このような漆塗料を先人たちはどのように使いこなしていたかについては案外知らない情報も多いと考えられる。今回は、建築文化財における漆塗料を使用した修理に関する諸問題を、分析化学、塗装技術史、塗装修理、行政指導それぞれの立場で現在取り組んでいる講師を招いて、東京文化財研究所地階セミナー室において関連する多方面の方々にご参加いただき研究会を行った。

第3回「建築文化財における漆塗料の調査と修理 ―その現状と課題―」

日 時：2010（平成22）年1月21日（木）

会 場：東京文化財研究所セミナー室 13：30～17：40

講演者：本多貴之（明治大学）「漆塗料の劣化のメカニズムを探る（分析化学の立場から）」

北野信彦（東京文化財研究所）「建築文化財における漆塗装の歴史（塗装技術史の立場から）」

佐藤武則（日光社寺文化財保存会）

「日光社寺建造物群における漆塗装の修理（塗装修理の立場から）」

西和彦（文化庁）「建築文化財における塗装修理の考え方（行政指導の立場から）」

## 近代の文化遺産の保存修復に関する研究会（①修06-09-4/5の一部として実施）

平成21年度は、近代化遺産の中でもコンクリート建造物の保存と活用を主なテーマとして研究を行った。国内において重要文化財に指定されているコンクリート建造物（山邑家住宅、秋田池田氏庭園洋館等）の保存と修復・活用に実際に携わっておられる方を、また、九州各地に於いて、コンクリート製掩体壕等の修復に携わられている方、さらにドイツから産業遺産の保存修復に関する計画等の立案に携わられている方も招いて、東京文化財研究所の地下セミナー室において、コンクリート建造物も含めた建造物の研究者の方々にご参加いただき、各研究者の視点からコンクリート建造物の保存と活用に関する研究会を行った。

第23回「コンクリート建造物の保存と活用について」

日 時：2010（平成22）年3月1日（月）

会 場：東京文化財研究所セミナー室 13：00～17：20

講演者：中山俊介（東京文化財研究所）「コンクリート建造物の保存と修復」

西岡聡（文化庁文化財部参事官（建造物担当））「コンクリート造文化財建造物の現況と課題」

小林裕幸（（財）文化財建造物保存技術協会）

「鉄筋コンクリート躯体の補修―名勝池田氏庭園洋館の事例―」

松波秀子（清水建設（株）技術研究所高度空間技術センター）

「大正・昭和初期の鉄筋コンクリート造建築とその保存」

南里隼人（正栄建装（株）文化財部）

「コンクリート建造物の補修と九州に於ける近代化遺産への取り組み」

アルフレッド・ゴッドバルト（ドイツ技術博物館）

「Some aspects of concrete structure in German railway architecture of the 20th century and the difficulties of its preservation」

ロルフ・フーマン（ドイツ産業考古学事務所）「Concrete」

## 国際文化財保存修復研究会（②セ01-09-4/5の一環として実施）

### 目 的

文化財は、個々の地域の文化と伝統を反映し、地域の人々の思いに支えられて現代に伝えられたものであり、その内容、材質、おかれている物理的な環境の違いとともに、文化財自体に対する人々の接し方、保存修復の考え方にも違いがある。国際協力による文化財の保存修復とは、パートナーとなる国や地域の状況を理解し、同時に私たち自身の文化財の保存修復についての考え方や方法を理解してもらいながら、互いの協力によって推進されるべきものである。日本の専門家による海外の文化財保存修復事業への参加がますます増えている現在、東京文化財研究所は、みずから国際的な文化財の保存修復活動に参加するとともに、専門家相互のネットワークを作り、情報交換の場を提供していくことを大きな使命と考えている。このような目的から、国際文化財保存修復研究会を開催し、さらには文化財をとりまく社会の問題、文化そのものの問題など、多岐にわたる情報交換の場を提供している。

### 成 果

平成21年度は、以下のとおり研究会を実施し、またその報告書を出版した。

テ ー マ：遺跡はなぜ残ってきたか

趣 旨：遺跡の保存修復が行われるのは、その遺跡が傷んでいる場合が殆どだが、良好な状態で残されている遺跡が、なぜ残っているかを考えることは、傷んでいる遺跡を保存修復していく際にも有効な情報を与えてくれると考えられる。本研究会では、残りの良い遺跡についての情報を、参加者の間で共有する機会とした。

日 時：2009（平成21）年10月8日10：30～17：00

会 場：東京文化財研究所会議室、出席者数：43人

講演内容：パオラ・ヴィルジッリ（ローマ文化財監督局）「アウグストゥスのパンテオンとハドリアヌスのパンテオンー将来的な保存のための調査、発掘、研究、診断」

原田雅弘（鳥取県埋蔵文化財センター）「青谷上寺地遺跡の保存環境」

チェチェック・エカ・プルマナ（インドネシア大学）

「インドネシア・南スラウェシの洞窟壁画とその保存における問題点」

報告書出版 1冊：『第23回国際文化財保存修復研究会報告書』 10.3



総合討議風景

## 総合研究会 (④情)

総合研究会は、各部・センターの研究員が各自、テーマを設定し、研究プロジェクトの成果を発表し、それに対して所内の研究者が自由討論する研究会である。総合研究会の開催は企画情報部が担当する。平成19年度より独立行政法人国立文化財機構に対し、総合研究会の案内を通知している。平成21年度は下記のスケジュールで実施した（会場：東京文化財研究所セミナー室）。

- ・第1回 2009（平成21）年6月2日（火）  
木川りか（保存修復科学センター）「高松塚古墳・キトラ古墳の劣化に関わった微生物について」
- ・第2回 2009（平成21）年9月1日（火）  
皿井舞（企画情報部）「彫刻史研究データベースの作成と平安初期薬師如来像にかかわる諸問題」
- ・第3回 2009（平成21）年11月10日（火）  
友田正彦（文化遺産国際協力センター）「アンコール遺跡保存の15年」
- ・第4回 2009（平成21）年12月1日（火）  
田中淳（企画情報部）「『東京文化財研究所75年史（本文編）』の編集にあたって―「関連資料」を中心に―」
- ・第5回 2010（平成22）年1月5日（火）  
加藤雅人（保存修復科学センター）「絵画・文書など、紙本絹本文化財に関する用語の研究」
- ・第6回 2010（平成22）年2月2日（火）  
俵木悟（無形文化遺産部）「無形文化遺産の記録所在情報データベース構築に向けて―現状報告」

## 企画情報部研究会 (④情)

企画情報部ではほぼ月に1度のペースで美術史研究者による研究会を開催、それぞれの研究やプロジェクトの成果を発表し、さらに議論によってその充実を図っている。平成21年度は下記のような研究会が行われた。

- 4月22日 綿田稔「福岡城本丸御殿の雲谷派障子絵について」  
田中淳「試論「新しい女」と「風船を持つ女」―萬鉄五郎作《風船を持つ女》の制作背景と表現」
- 5月27日 江村知子「近世初期風俗画の実在感」
- 6月23日 丸川雄三（国立情報学研究所、当部客員研究員）「連想でひろがる美術資料の情報発信」
- 7月29日 塩谷純「川端玉章の研究―玉章の“支那画”観」
- 9月30日 吉田千鶴子（東京藝術大学、当部客員研究員）  
「今泉雄作「記事珠」の研究・中間報告―宝物調査日記を中心に」
- 11月25日 津田徹英「奈良国立博物館蔵 木造南無仏太子立像とその周辺」  
勝木言一郎「法隆寺金堂壁画四大壁の四方四仏説をめぐって」
- 12月25日 相澤正彦（成城大学、当部客員研究員）「二人の将軍を描いた曾我物語図屏風」
- 1月27日 山梨絵美子「黒田記念館の平成21年度受贈作品について―黒田清輝筆《舟》、《芍薬》、  
《日清役二龍山砲台突撃図》、《林政文肖像》2点」  
國本学史「彩色材料名称形成過程における染料と顔料の混在について」
- 2月12日 清水重敦（奈良文化財研究所）「近代京都画壇と家：近代における和風建築の表現と画家の貢献」  
コメンテーター：小倉実子（京都国立近代美術館）、田中修二（大分大学）

#### ④研究集会・講座等

2月25日 アート・ドキュメンテーション学会共催

「セインズベリー日本藝術研究所と英国の文化財アーカイブ」

平野明（セインズベリー日本藝術研究所リサ・セインズベリー図書館）

「セインズベリー日本藝術研究所の活動と資料—英国における日本美術研究の現場から」

ディスカッション「セインズベリー日本藝術研究所と英国の文化財アーカイブ」

パネラー：平野明、森下正昭（当部客員研究員）、出光佐千子（出光美術館）

3月24日 綿田稔・江村知子・土屋貴裕「ポर्टランド美術館所蔵作品調査報告」

コメンテーター：河合正朝（出光美術館）

### 保存修復科学センター研究会（④保）

1) 「文化財の生物劣化の非破壊調査と虫害調査および修理における利用」

日 程：2009（平成21）年11月20日（金）、13：30～16：50

会 場：東京文化財研究所地下会議室、参加者：15名

講演者：原田正彦（財団法人日光社寺文化財保存会）

「日光山輪王寺本堂での隠れた虫害—対応と修理について」

小峰幸夫、山野勝次（財団法人文化財虫害研究所）「害虫の調査と同定結果、生態などについて」

藤井義久、藤原裕子（京都大学大学院農学研究科）

「レジストグラフ、AEなどによる調査結果について」

鳥越俊行、木川りか（九州国立博物館・東京文化財研究所）

「X線CTによる被害材の調査と応用について」

2) 「文化財の保存環境を考慮した博物館の省エネ化」

日 程：2009（平成21）年12月8日（火）、13：30～17：45

会 場：東京文化財研究所セミナー室、参加者：75名

講演者：ステファン・シモン（ラトゲン保存研究所）

「欧州での博物館の省エネ化と展示、収蔵施設内の保存環境」

銚井修一（京都大学）「温熱環境からみた博物館の省エネ化」

足永晴信（国土交通省国土技術政策総合研究所）

「低炭素型社会での持続可能な都市空間実現に向けた取り組み」

神庭信幸（東京国立博物館）

「低炭素社会と共存する文化遺産の保存—東京国立博物館の取り組み—」

(3) 「文化財施設内の温湿度解析および建築部材内の熱・水分移動解析に関する研究会」

日 程：2010（平成22）年1月26日（火）、13：30～17：00

会 場：東京文化財研究所地下会議室、参加者：13名

講演者：ジョン・グルネワルド（ドレスデン工科大学）、吉川也志保（東京文化財研究所）

「図書館内の環境評価とカビ発生リスクに関するシミュレーション解析」

アンドレアス・ニコライ（ドレスデン工科大学）

「不飽和多孔質建築部材内の塩分移動と相変化に関するモデル化と数値解析」

ルドルフ・プラーゲ（ドレスデン工科大学）「建築部材の水分特性の測定手法」